（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	黄　潔
論文題目	センー（Senl）の民俗誌 ―中国南部におけるトン族（Kam）の流域社会システム論―		

（論文内容の要旨）

本論文は、中国南部に居住する少数民族トン族の社会組織を、センという河川流域社会システムに着目して描き出すことを試みた民俗誌である。広義のタイ語系民族の分布圏の北端に位置するトン族は、同系統の民族の中にあっても漢文化の受容の度合いが高く、そのためトン族の社会組織の分析は、款（盟約）や宗族といった漢語の分析概念の無批判な適用によって行われてきた。それに対し本論文では、センというトン語固有の概念に即してその地域社会の論理を内側から描き出すことを試みている。

第一章は序論であり、本論文全体の立場が示されている。本章では、漢語の分析概念の無批判な適用に基づく従来のアプローチが、トン語に固有の地域概念への視野を全面的に欠いているという問題点を指摘し、それに代えてトン族の地域社会概念を内側から理解する鍵として、センという流域概念に着目する必要性が提示される。

第二章では、トン族地域社会の編成原理における地縁の論理と親族の論理について考察が加えられている。トン語では村落社会はトゥアンシャイと呼ばれ、父系出自集団はプラと呼ばれる。トン族は漢語を書記言語として用いるため、プラは文語レベルでは漢民族の宗族に相当するものとして記述される一方、地域社会は親族用語によって言及される傾向にあるため、トゥアンシャイやその流域的まとまりであるセンが一個の宗族であるかのように語られるという現象を生み出している。

第三章では、トン族固有の親族組織と漢民族の宗族の論理との相違と、それを調停するための制度がとりあげられる。トン族は漢姓を用いる一方で、漢民族とは異なり同姓間の結婚は忌避されてこなかった。ここから生じる、漢民族の宗族における同姓不婚原則との齟齬を回避するために生み出されたのが、同一姓集団を複数の姓に名目上分割するという制度である。また複数の姓の使い分けは、新規移住者が自分たちの旧姓を保持したまま先住者のプラに合併する場合にも適用されており、血縁関係のない先住者と後住者との関係を親族用語で語ることを可能にしている。

第四章では、地域集団が出自集団として読み替えられていくメカニズムを、村落祭祀と祖先祭祀の事例から検討する。トン族社会においては、それぞれのセンやトゥアンシャイごとにサーや飛山といった神が祀られている。これらは土地神であるが、しかしその祭祀権は地域社会内の有力プラの長老が兼帯することになるため、祭祀集団が出自集団と重なる傾向を帯びることになる。各プラの祖先祭祀も同様に、後来の劣

位集団が先住者の有力プラの分節として吸収されていることから、地域集団を出自集団として表現する傾向を補強する役割を果たしている。

第五章では、トン族の地域社会の凝集性とダイナミズムを規定する因子として、人々の通婚圏が分析の俎上に載せられる。トン族社会においては、部外者の影響を排除し地域社会内の結束を維持するために、地域社会内での内婚が重視される。ここでは劣位の外来者集団は通婚圏から排除されるが、しかしこれはあくまで、姓集団の合併に伴う通婚規制の適用として処理される。通婚圏に関するこうした慣行は、地域社会が親族モデルで語られるという事実と、それにもかかわらず後住者が先住者から排除されて従属的な地位に置かれているという現実をともに説明している。

第六章では、トン族地域社会のリーダーシップの特徴が検討される。トン族の地域社会の特徴は、常設のリーダーをもたないことである。それぞれのプラは、親族集団の長老を意味するニンラオと呼ばれるリーダーを有しており、トゥアンシャイ内部のプラ相互のトラブルはトゥアンシャイのニンラオが、トゥアンシャイ相互のトラブルはセンのニンラオがそれぞれ随時選出されて問題の解決にあたる。これらは、その領域内の有力プラのニンラオから調達されるため、地域社会のリーダーシップもまた、親族用語で表現されることになる。

第七章は結論である。以上の考察からは、トン族社会の構造を、河川流域ごとに割拠する無頭的な村落連合の集合体として把握すべきことが明らかになる。その特徴は、地域集団があたかも出自集団であるかのように表現される点、および、そこでの社会像が書記言語としての漢語のバイアスに常に引きずられる点に求められる。トン族社会に見られる、出自集団の合併や分割、特定の先住者集団による一部後住者集団の包摂と排除といった一連の動態は、いま述べた建前と現実との差異を埋めるための試みとして了解可能であるとするのが、本論文が新たに提示する視点である。